第２章「男子トイレの花子さん」

次の日も雨だった。
朝からずっと降り続いている昨日ほどの激しい雨ではなく小雨程度だが、体を濡らすには十分な量だろう。
メリーさんが気にかかる。そう思っていると突然着信音が鳴った。
「おはようメリーさん」
２コールで出てそう言うと
「私、メリー・・・ってなんでわかるんですか」
おなじみのセリフを邪魔してしまった。
「昨日電話帳に登録しておいた」
着信とともに画面に出るメリーさんの文字
「そ、そうですか・・・私の仕事が・・・」
困ったような声が受話器の奥から聞こえてきた。
「それで、今日も家来るの？」
「あっ、お邪魔でないならお願いしたいです」
「いいよ、親もいないし」
「ありがとうございます、それでは１５分ほどで」
そう言うとプツンと通話が切れた。
うん、やはりマナーを弁えてるなと思いつつ、メリーさんが来てもいいように準備をする事にした。
またずぶ濡れなんじゃないかと思いバスタオル。それから紅茶を用意する事にした。
今日はキャンディでミルクティーでも作ろうかな、時間はあるし１５分を掛けてお茶を準備した。喜んでくれるだろうか？

お茶を持ちバスタオルを抱え自分の部屋に戻る。メリーさんはまだ来てないようだ。
お茶とバスタオルを中央の机に置き、ベットへ腰掛ける。
照明から吊り下げられた紐を眺めながらこれからどうしたらいいか考えていると携帯が鳴った。
画面を確認すると案の定メリーさん。
電話に出ずに振り向いて見るとメリーさんはすでにそこにいた。
やはりずぶ濡れでベットの上に正座。
こちらを向けて、ちょっとふて腐れたような顔でこっちを見ている。
「まだ振り向かないでくさださいよ」
と、ちょっと怒っているのだろうか少し声が低い
「ごめん、つい」
素直に謝ることとした。
我が家の家訓その2、何が悪いのかは謝ってから考えろ。
親父の口癖だ。
まぁ検討は付くが電話に出ていたほうがよかったのだろう。
「もう2回目なんでいいんですけどね」
でも私の存在意義が…とメリーさんは言った。
「悪いんだけど布団が濡れてしまう」
そこらへんはきっちりしてもらおう。寝ることが好きな僕にとっては死活問題だ。
「あっごめんなさい！」
すぐさまメリーさんはベットを降り、昨日の定位置へと付いた。

やはりいい娘だな。
あらかじめ用意して置いたバスタオルと紅茶を手渡す。
なぜこの娘はいつもびしょ濡れなのか？疑問に思った事を素直に聞いて見た。
「傘とか持ってないの？」
「か…さ…？持って…ないですね」
「…？」
なんだろうか今の曖昧な返事は？
よくわからないが帰りがけに傘を貸してやろうと思った。
「本題に入りたいのですが」
メリーさんは紅茶を啜りながら言う。
「私はたぶん、これ以上人を驚かす事はできないと思うんです」
うん、なんとなくわかる。
あれで驚ける人間はほぼいないだろう。
「それで考えたんですが残りの滞在期間で目的を果たそうかと」
「何日残ってるんだ？」
「死んでからの初回ポイント１ヶ月はほとんど使ってしまったので、昨日の１４日を合わせると残り１８日です」
１８日か…どうだろうか長いようで短い気がする。そもそも初回ポイントは気になるがあえてスルーしよう。
「わかった、その間に目的を果たせばいいんだな？」
「はい、お願いできますか？」
僕は二つ返事で承諾した。
「困ってる女は助けろって親父によく言われててね」

「優しいお父さんですね」
正確には困ってる女は不細工でも助けろなんだけど、なんでも妹や姉は可愛いかもしれないとの事。それは口にしないが。
とりあえず、明日学校で事故について調べる事にしよう。
「とりあえず、覚えてる事を話してくれるかな？何か手がかりがあるかもしれないし」
「はい、わかりました。」

話を聞いて愕然とした。
メリーさんは自分の名前以外ほとんどのことを覚えていない。
家族のことさえも家族がいたとしかそんな認識しかない。
ほぼ記憶喪失と言っていいだろう。
それでも断片的な記憶は残っているようだ。
「屋上、川、神社」など地名もいくつかでてきた。
この場所をたどる事で目的が見つかるのだろうか？思ったよりもかなり難しいかもしれない。前途多難だ。
あらかた話し終わるとメリーさんはまた泣きそうな顔になっていた。
これはいけない、女だけは泣かすな。これは最優先事項だと言っていた親父に殴られる。
慌てて話題をそらす事にした。
「メリーさんは食事とかどうしてるの？」
「え？え～と別に食べなくても生きて？いけますが食べる事はできます。私は結構上級霊なので物を食べることも触れる事もできるんです」
ほぉ。と、いろいろ勉強になるな。
僕もいつか死ぬのだから今のうちに仕組みを覚えておくのもいいかもしれない。
その後も他愛も無い世間話が続いた。

「ところでその素敵なお父さんは何をしてるんです」
「あ～去年死んじゃった」
「あ…ごめんなさい…」
親父は去年死んだ。
病気だったが死ぬ直前まで看護婦をはべらせて病室はハーレム状態だった。
そう思うと親父は成仏したのだろうか？
あらかたこの世に残って妖怪枕返しとか微妙な役職をやってる気がする。女の部屋に入り、枕を返して喜んでいるかもしれない。
そう考えると親父らしくて可笑しくなってしまった。
「ところで…メリーさんはこの辺りでその…死んじゃったの？」
「そうなりますね、自分の死んだ場所からあまり遠くには行けませんから」
「そうなの？」
「はい、ちなみ私はN県O市担当メリーさんです。担当場所以外は出られません」
そういう事か、各地で目撃されてる幽霊や妖怪が場所によって姿や形が違うのはそのせいか。
つまりメリーさんだけでもかなりの人数がいるということだ。ますます、シビアな世界だ。
その後も話は続いた、メリーさんに一方的質問ばかりしていたが。
整理するとこうだ。

約１ヶ月前の雨の日に交通事故で死んだ。
記憶はほとんど飛んでいるが断片的なものは残っている。
「屋上、神社、クレープ屋、川」などのキーワード
俺と同じ１７歳

好きな食べ物は蕎麦
残った日数は１８日

なんとかなるかならないかは微妙だが、何しろ小さい町だ。範囲は絞られてくる。
曖昧なヒントしかないのは心元無いが・・・。だが、彼女を助けると決めたからにはがんばるしかないだろう。
そもそもなんで僕はこんなに必死になっているのだろうか？
メリーさんが可愛いのは一つの原因だろうがそれだけでは無い気がする。

ふと、時計を見ると3時間ほどが経過していた。そろそろ親が帰ってくる頃だろう、今日はお開きにすることにした。
本格的に行動するのは明日からだ。
しかし学校というものがある。放課後から探すとしても時間は限られてくる。
実質１８日より少ないかもしれない。
「そろそろ帰りますね」
「わかった、あっちょっと待ってて」
僕は玄関へと向かった、小雨とはいえまだ雨は降っている。傘を貸してやろう。
傘立にを見ると傘は1本しかなかった。僕の傘は前に誰かに貸したまま返ってこない。
最後の1本は親父の傘だった。
形見のようなものだが女の子を助けるためだ。親父なら許してくれるだろう、というか貸さなかったら呪われそうだ。
黒の大きめの傘を手に取り2階へと戻った。
「傘さしていきなよ」
メリーさんに差し出すと、驚いたと言うか、なんと言うか微妙な顔をしていた。

「傘…いいんですか？」
「いいよ、明日は晴れるらしいし。というか貸さないと…」
親父に呪われると、言うとメリーさんは笑った。
「幽霊に傘を貸すなんておかしな人ですね。でも…それではお借りします」
途中ごにょごにょとよく聞こえなかった。
「ああ、また連絡してくれ、今度はちゃんと電話をとってから振り向くから」
と、メリーさんは笑顔で会釈した。
傘は壁を抜けられないので窓を開けメリーさんは雨の中へ消えていった。

さぁ、明日から忙しくなるな。そう思いながら開けっ放しの窓を閉じると、同時に玄関のドアが開く音がした。
親が帰って来たのだろう。今日の晩御飯はなんだろうな。
蕎麦だったらいいな。